



《Y市の橋》1943年、油彩・画布、東京国立近代美術館蔵

# 松本竣介展

MATSUMOTO Shunsuke  
A Centennial Retrospective  
生誕100年

2012年11月23日|金祝|—'13年1月14日|月祝|

世田谷美術館  
Setagaya Art Museum

休館日＝毎週月曜日[ただし12月24日(月祝)、1月14日(月祝)は開館、12月25日(火)は休館] および年末年始:12月29日(土)～1月3日(木)  
開館時間＝午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで) ※本展では前期(～12月16日)・後期(12月18日～)で素描等の展示替があります。

●展覧会のご案内:03-5777-8600(ハローダイヤル)

主催＝世田谷美術館(公益財団法人せたがや文化財団)/NHK/NHKプロモーション 制作協力＝NHKプラネット東北 後援＝世田谷区/世田谷区教育委員会

# 松本 竣介展

生誕100年

そのとき画家は何を見つめていたのか

松本竣介(1912-1948)は、昭和前期の近代洋画史に、一種独特の足跡を遺した画家でした。新しい時代の絵画を標榜しつつも、過激なだけの前衛性や画壇での政治的栄達には背を向け、あくまでも個としての自由を貫きとおした凛然たる表現者であったともいえるでしょう。戦時下、都会の一隅にあって時代の趨勢や生活者としての現実をきわめて冷静に見つめながら、同時に、絵画にみずからの生死を賭した彼は、わずか36歳という若さで病に倒れ天逝してしまいました。しかし、その厳しくも清廉なる画家精神は、作品のなかに今なお息づいており、多くの人々を魅了しつづけています。

少年時代を過ごした盛岡で13歳のときに聴覚を失ったのち、画家になる決意を固めた竣介は、1929年に上京。以後の約20年間で、短いながらも起伏に富んだ竣介の画歴となりました。本展では、その画歴を大きく4つの章に分けて紹介します。二科展を舞台に頭角を現わし、都会の律動をさまざまに描き出していった前半期の作品。そして、大きな画風の変化を見せた1940-41年以後の後半期の作品群からは、謎めいた人物画や静まり返った風景画を。さらには敗戦後、世界する直前に着手した新たな画風まで、本展では、油彩・約120点、素描・約120点、スケッチ帖や書簡などの資料・約180点をもって、この不世出の才人・松本竣介の足跡をつぶさに振り返ります。

## I. Works from the First Half of the Artist's Career: from 1927 to around 1941

### 前期 [1927年~1941年頃]

I-1. 初期作品 / I-2. 都会:黒い線 / I-3. 郊外:蒼い面  
I-4. 街と人:モンタージュ / I-5. 構図

本章では、都会の諸相をテーマにめぐるしく画風を変化させていった青年期の作品を展覧します。1935年には二科初入選を果たし、以後、竣介は次々と新作を発表してゆきました。またこの時期、妻・禎子とともに月刊誌『雑記帳』を創刊。制作のかたわら、文芸の世界にも視野を拡げ、多面的な活動を展開しました。



《郊外》1937年8月、油彩・板、宮城県美術館蔵



《黒い花》1940年2月、油彩・板、個人蔵



《都会》1940年8月、油彩・板、大原美術館蔵

## II. Figures from the Latter Half of the Artist's Career: from around 1940 to 1948

### 後期:人物 [1940年頃~1948年]

II-1. 自画像 / II-2. 画家の像 / II-3. 女性像  
II-4. 顔習作 / II-5. 少年像 / II-6. 童画

折しも戦局が悪化した1940-41年頃を境に、竣介の画風は決定的な変化を見せます。本章では、成熟期を迎え、絵画に没頭するようになって以後の作品より、人物画を集めて展覧します。代表作《立てる像》など自省的な自画像を描いたり、画家の本分を説いた評論「生きてゐる画家」を発表したのもこの時期のことです。



《顔(自画像)》1940年12月、油彩・板、個人蔵



《黒いコート》1942年1月、油彩・画布、個人蔵



《水を飲む子ども》1943年頃、油彩・板、岩手県立美術館蔵

# MATSUMOTO Shunsuke: A Centennial Retrospective

## III. Landscapes from the Latter Half of the Artist's Career: from around 1940 to 1947

### III. 後期:風景 [1940年頃~1947年]

III-1. 市街風景/III-2. 建物/III-3. 街路/III-4. 運河/III-5. 鉄橋付近  
III-6. 工場/III-7. Y市の橋/III-8. ニコライ堂/III-9. 焼跡

大きく画風を変化させた1940-41年頃から、竣介は足繁く街を歩いてはスケッチを重ね、実写をもとに独特の透明感をもった静謐な風景画を描くようになりました。都会の喧騒からは隔絶した場所、人気のない、何の変哲もない裏通りからの眺めは、かつて描かれたことのなかった都会風景となり、「無音の風景」とも称されました。



《白い建物》1941年頃、油彩・板、宮城県美術館蔵



《こみ捨て場付近》1942年4月、鉛筆・コンテ・木炭・紙、個人蔵



《風景》1942年6月、油彩・画布、個人蔵



《鉄橋付近》1943年3月、油彩・画布、島根県立美術館蔵



《Y市の橋》1946年、油彩・画布、京都国立近代美術館蔵

## IV. Works from the Artist's Turning Point at a New Stage: from 1946 to 1948

### IV. 展開期 [1946年~1948年]

IV-1. 人物像: 褐色に黒/IV-2. 新たな造形へ

敗戦直後の混乱のなかで、竣介は再び新たな絵画を模索しはじめました。同時に、新雑誌の創刊や超党派の美術家組合の結成を企図するなど、いち早く未来への展望を掲げて活動を再開しましたが、道なかばにして病に倒れて他界。本章では、期せずして「竣介最晩年の遺作」となった新傾向の作品を展覧します。



《ランプ》1948年、油彩・厚紙、個人蔵



《建物(寄)》1948年5月、油彩・画布、(公財)大川美術館蔵



《彫刻と女》1948年5月、油彩・画布、福岡市美術館蔵

そのとき画家は何を見つめていたのか



《立てる像》1942年、油彩・画布、神奈川県立近代美術館蔵

講演会「松本竣介の生涯と作品」

日時：11月24日(土)  
午後2時～3時30分 [開場:午後1時30分]  
講師：栗津則雄氏(文芸評論家)  
会場：世田谷美術館・講堂  
定員：当日先着150名 [午前10時より整理券配布]  
聴講料：無料(手話通訳付)

対談「画家・竣介の実像、生活と芸術と」

日時：12月15日(土)  
午後2時～3時30分 [開場:午後1時30分]  
話し手：中野淳氏(画家、竣介の後輩)  
松本莞氏(建築家、竣介の次男)  
聞き手：杉山悦子(当館担当学芸員)  
会場：世田谷美術館・講堂  
定員：当日先着150名 [午前10時より整理券配布]  
聴講料：無料(手話通訳付)

100円ワークショップ

どなたでも、その場で気軽に参加できる工作など  
日時：会期中の毎土曜日 [ただし、12月29日(土)を除く]  
午後1時～3時  
場所：世田谷美術館・地下創作室  
参加方法：時間中随時受付  
参加費：1回100円

観覧料：	一般	65歳以上	大高生	中小生
当日	1200円	900円	900円	500円
前売・団体	960円	720円	720円	400円

\*団体は20名以上  
\*障害者の方は500円(介助の方1名までは無料)、大高中小生の障害者の方は無料  
\*主なチケット販売所＝世田谷美術館、ローンチケット(Lコード:38104)、セブンイレブン(セブンコード:019-231)、イープラス  
\*11月22日(木)までは前売券を販売。会期中は当日券を販売

世田谷美術館 Setagaya Art Museum  
〒157-0075 東京都世田谷区砧公園1-2 Tel: 03-3415-6011(代)  
<http://www.setagayaartmuseum.or.jp>

\*本展では前期(～12月16日)・後期(12月18日～)で素描等の展示替があります。

●次回企画展  
「エドワード・スタイン写真展 モダン・エイジの光と影 1923-1937」  
2013年1月26日(土)～4月7日(日)  
●次回ミュージアムコレクション「高橋秀の世界 版画1959-2000」  
2013年1月25日(金)～4月21日(日)

交通案内：  
東急田園都市線「用賀」駅下車、北口から徒歩17分、  
または美術館行バス[美術館]④下車徒歩3分  
小田急線「成城学園前」駅下車、南口から渋谷駅行バス「砧町」⑤下車徒歩10分  
小田急線「千歳船橋」駅下車、田園調布駅行バス「美術館入口」⑥下車徒歩5分  
来館者専用駐車場(60台、無料)：  
東名高速道路高架下、厚木方面側道400m先。美術館まで徒歩5分

